

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	斐 芝允
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
教育のための「身体感性論」の研究 — 「改良主義」と身体的「実践」に着目して—			
論文審査担当者			
主 査 教授 樋口 聡			
審査委員 教授 井上 弥			
審査委員 教授 山内 規嗣			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、アメリカの哲学者で美学者であるリチャード・シュスターマンが提唱する「身体感性論 (somaesthetics)」に注目し、身体感性論と教育を結びつけることによって、教育に対する新たな視座を生み出し、教育実践ならびに教育研究のあり方に新たな提言を行うことを試みるものである。研究の目的は、プラグマティズムとしての身体感性論の内容をおさえ、身体感性論の軸である「改良主義」と「実践」に着目し、「改良主義」の軸から身体感性論と教育の相補性を明らかにし、「実践」の軸として身体感性論の教育的具現の例を歴史的に探ることである。</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章で、プラグマティズムとしての身体感性論の内容が解明されている。まずプラグマティズムの系譜が辿られ、ジョン・デューイ、ウィリアム・ジェームズ、ラルフ・ワルド・エマソンの3人の思想家が取り上げられた。そして、この3人の思想家の思想がシュスターマンの身体感性論の構想においていかに機能し、影響を与えたかが、この章では検討されている。デューイの「経験概念と身体訓練 (デューイにおいてはアレグザンダー・テクニク) の重視」、ジェームズの「身体と社会・文化の連続性を捉える身体と美学の議論」、エマソンの「哲学を実践するための生きる技芸」が、重要な論点として析出された。</p> <p>第2章は、身体感性論の改良主義 (meliorism) に焦点を合わせている。教育において避けることのできない、そして問題含みの改良主義として、優生思想と啓蒙主義が取り上げられ批判された。このアポリアを乗り越える手立てとして、身体感性論が持ち合わせている別の形の改良主義が見い出され、評価された。その評価の要点は、自己意識による身体的経験の質的向上と、ペシミズム、オプティミズムといった二項対立図式のプラグマティックな折衷＝克服、に見出された。</p> <p>第3章では、研究のまなざしを一転させ、身体感性論の理念の具現化の一事例として、韓国の新羅時代の一つの教育組織であった花郎 (ファラン) に目を向けている。こうした研究の姿勢は、シュスターマンの身体感性論が、人間の根源的なあり様に目を向け特に近代以降喪失さ</p>			

れた視点の回復を目指すものとして近代以前の思想や非西洋の思想に着目していることに倣うものであり、また、その研究戦略に依拠するものである。シュスターマンの哲学の伝記的理解の方法からして、筆者であるベ・ジュンが自らの文化的ルーツと通じる韓国の花郎を取り上げていることは、意味あることであり、独創的でもある。花郎に見られる風流道の美的人間像、歌楽による快の探求と生き方の改良につながる広義の芸術教育の重視、自然と向き合う修行としての学びの機会である巡遊が、花郎の実践内容として明らかにされ、身体感性論の視点から見た花郎の教育的意義が指摘された。

本論文は、以下の3点で高く評価できる。

(1) 身体感性論という新しい学問的営みに着目し、その視点から、近代教育そして現代の教育システムの根源的な問題性に、新たな形で迫りうる可能性を明示したこと。

(2) 反基礎付け主義と身体感性の快という基本原理から、思想としてのプラグマティズムの再評価を行ったこと。それは、例えば、デューイの教育論の再評価への道を拓くものである。

(3) 理論と実践が絡み合った教育思想のあり方を理論的・分析的推論とともにプラグマティックに教育実践の中に見出すという身体感性論の独自の метод論を、具体的な事例(韓国の花郎)を取り上げて実践したこと。この試みは、歴史的想像力とでも呼ぶべきものを喚起し、現代の教育実践の改革に実践的な示唆を与えるものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年 2月 4日